

## 編集後記

「このようなことはナチスでも行わなかったことだ」

東京大学にある自分の研究室を全共闘の学生たちによって荒らされた丸山真男が、咄嗟に口にした言葉である。一九六〇年代の終りにこの発言は、当時の活動家にとつて嘲笑の標的とされた言葉だった。

当時、高校生だったわたしもまた同じ意見だった。高校での政治闘争が原因で停学処分をくらひ、中卒労働者という資格でケーキ工場で毎日四千個の生卵を割るといふ作業に従事していたわたしにとって、日本の帝国主義的再編に加担するアカデミズムの内側に隠匿されている資料は、それ自体が反動的な存在であり、それらを否定する革命こそがもっとも優れた、究極的な文化の表現であると信じられていたからである。当時、北京で紅衛兵運動に参加していた同世代の少年たちから、わたしは圧倒的な影響を受けていた。

わたしは三十二年後の今、考える。も

しこの原稿を書いているこの研究室にヘルメットを被った学生たちが乱入してきて、本棚と床に所狭しと積み上げられている映画史の資料を破壊したとしたら、わたしはどうするだろうか。おそらく丸山真男と同じ言葉を口にするだろう。いや、むしろ研究室のロッカーに隠してあるワインの瓶を叩き割って、命にかけても暴徒たちと立回りをすることだろう。

ここには二十一年間にわたつて北京、ソウル、ピョンヤン、台北、香港といった東アジアの都市を風潰しに回つて蒐集した、映画をめぐる夥しい資料、書物、ヴィデオが集められている。なかには現在では現地でさえ入手が不可能なものも混じっている。そのすべてを自分が検証し論文のために役立たせるかという、とつていその時間も能力もない。ただ資料がここにある、いつか誰かがそれを聞きつけて利用してくれるだろうという期待をもつて、わたしは蒐集と保存を続けてきたのだ。映画史家である現在のわたしにとつて、それこそが文化の表現であり、二十世紀を代表する表象ジャンルでありながらも不当にアカデミズムから貶められてきたこの映画というメディアに

対する、仁義のとり方なのだ。  
わたしは転向したのだろうか。変節したのだろうか。

今回の特集を編みながら気になっていたのは、そう思った思いだった。そのあたりの問題に自分なりに結論を出すためには、わたしはいずれ一冊の書物を執筆しなければなるまい。

本誌の刊行がいささか遅れてしまったことを、寄稿者の皆様にお詫びしたいと思う。アンケートにお答えくださった方々に、重ね重ねねお礼を申しあげます。

(四方田犬彦)

十六號にヒボクラテースに出る例の *as long as the boys* を芥川龍之介が「人生は短い故刻苦精勵を重ねても、容易に一藝を修める事は出来ぬと云ふ意味であつて、人亡べども業顯ると云ふ意味である」と(雑筆、一九二〇年)と書いたこと。渡邊一夫がその前半を「藝術の道は遠い」(翻譯について)、『都新聞』一九四〇年四月六(九日)と譯したこと。中野重治が渡邊譯を支持して「つまり、やはり言葉を正確に譯して貰ふ方がいい。as

longa vita brevis あれを岩波の『ギリシア・ラテン引用語辭典』で引くと、『藝術は長く、人生は短し。』と譯してゐるが、これだけでは、在來の誤譯ないし誤解の十分な訂正にはならぬだらうと思ふ。渡邊一夫が、『都新聞』で翻譯について書いてゐるが、(中略)何だか、なかなかうまい言葉でこれを譯してゐた(『雜誌』として、『新潮』一九四〇年八月號)と書き、自分でも史記の『日暮途遠』に出づる『日暮れて道遠し』を小説の題名にした(『日暮れて』、『眺め』所収)したことに對して書いた。そして、自身は渡邊の『藝術の道は遠い』に續けて『生は否應ない』と、『あるいはそれを振つて』、『長生きをしなくては』と譯したのであつた。

その後、木下柰太郎を讀んでゐると、道は繁く、命は近い(『大寺の前の廣場』、『サンデー毎日』一九二二年六月十一、十八日號)と、『命は短い、爲る事は多い』(『フランスに於ける教育改革』、『文化』一九三九年四月號)といふ二つの彼の譯が出て來た。

この後の方の木下文は一九三六年東北大での演説の一部を書き改めたもので、

彼が一九二二年、フランスのパリイに在つて、當時議會で論議せられて居た此問題に興味を感じ、少し調べたこと」が基礎になつてゐる。彼の早すぎた死のあと一九四六年に『葱南雜稿(東京出版)』に収められたが、その「序」に著者太田正雄(彼は初めて本名を名乗つた)は書いた。「柰太郎は謂はば百姓柰兵衛の仲の意味である。木下は樹蔭である。愚昧の農童、大樹の花實の美を見て其原を探らうと欲し、鋤を以て地下一尺の處を掘る。現はるものは遂に土塊瓦石に過ぎなかつた。」「大正御宇の初、余南滿に在り、職を醫學に奉じた。未だ心友を得ず、秋冬の夜は螢然として孤燈に對し、好んで西域の諸傳を讀んだ。天山葱嶺の南路は若し能ふべくんば一度踏破して見たいと冀願した。是故に葱南を以て號となした。」「一九二二年フランス議會に於ける議論といふのは、中等教育でギリシャ語、ラテン語を廢止するかどうかに關してで、様々な人士が發言し、柰太郎はそれらを実に丹念にレポートしてゐる。酷暑の滿州に移住して、佛教の東アジアへの傳來を想ひ、シルクロード踏破を夢見、實際にも木村莊八と朝鮮・中國の旅をし、と

り分け大同の石佛の調査を果し、その後醫者としては普通であつたドイツを避けてフランスに二年間留學して、古典をどう繼承するかといふことに思ひをひそめた柰太郎であつたから、この古典語教育論議に注目したのであつた。柰太郎のことを考へてゐて、『現代を照射する古典』といふ小特集テーマを思ひついた。そして七人の稿を得ることが出來た。松田治さんはクイントゥス・トロイア戰記(二〇〇〇年八月講談社學術文庫)の譯者。これはイーリアスとオデュッセイアの間の出來事をやゝ後の人が編んだ叙事詩。金子佳司さんは長く研究員としてギリシャ語・ラテン語を擔當してくださつてゐる。徳永宗雄さんは今は京大に居られるが、かつて東京工大に居られた時に、工藤さんと竹内信夫さん(彼も書いて下さる筈であつたが、間に合はなかつた)とぼくとがサンスクリットを習ひに通つたのであつた。ホメーロス輪讀會にも參加された。ルヴェさんも我らの師である野津寛さんはこの四月にフランスから戻つて輪讀會に復歸される筈である。

(滿田郁夫)